

□ 本校研究の概要 □

1 本校は何を研究しているのか

一言で言えば、「生涯にわたって学び続ける強い学習意欲を育てるためにはどうするか」、つまり、**学習意欲の向上**を目指した研究を行っています。そして、それを実現させる手立てが「**ものがたりの授業**」であると主張しています。

令和2年度 研究主題

「わたし」が変わる「ものがたり」の学び

－ 語り合い、探究する中で、「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムの提案 －

2 研究主題について

(1) 学びとは何か

そもそも**人は何のために学び、どんな時に学ぶことの意味や価値を実感するのでしょうか。**

第4次産業革命、及び、それに伴う「Society 5.0」の到来が提唱されているようにI o T (Internet of Things) や人工知能(AI)に代表される科学技術の急速な発展は、近い将来、私たちの生活を大きく変えると予測されています。そのような近未来の話ではなくとも、今や、知りたい情報は手持ちのスマートフォンで検索すれば、ただちに知ることができるし、受験に必要な知識は、学校だけでなくインターネット上でも教えてくれます。

そういった知識や情報をめぐる社会の大きな転換期にあつて、**学ぶことの本来的意味や価値**が問い直されています。今後

ますます少子化が進む日本の学校教育において、受験圧力による外発的な動機づけによって学習意欲を喚起することは、ますます困難になっていくと思われま

「そもそも学びとは何か。」「何のために学ぶのか。」「なぜ学校という場所で学ぶのか。」といっ



た本質的な問いに、学校教育が応えなくてはならない時代を迎えているのです。

では、学びとはどのようなことでしょうか。本来、学びとは、自分を取りまく世界の見え方や感じ方を広げたり、深めたりするものであり、それによって自分自身が変わるものです。学んだことによる新たな知識の獲得だけでなく、異なる他者と出会い、相互に交流しながら学ぶこと。そして、そ



れが自分とつながり、自分自身を変えていくものになったとき、人は学ぶことの意味や価値を実感します。学ぶことの本来の楽しさ、学ぶことによって自分が変わっていくおもしろさを経験します。そういった経験の繰り返しこそが、生涯にわたって学び続ける「自立した学習者」を育てていくと考えています。

(2) 「わたし」が変わるのが「ものがたり」の学び

子どもたちが変わる学びにするために、私たちが重視しているのが、「ものがたり」の考え方です。「ものがたり」とは、出来事と出来事を結びつけ、自分にとって納得する形に筋立てて語る行為（及び、語られたもの）であり、それによって、現実世界や自分自身を理解していく様式です。

具体例をあげます。例えば、母親から厳しく家事を躰けられたという経験（図1・2中 出来事G）をもつ少女がいたとします。少女は友人の母親の優しい姿や同年代の友人が自由に遊んでいる姿を見て、次のように思っていました。「なぜ私だけ厳しく育てられるのか。」「母親は私のことを嫌いなのではないか。」（図1）

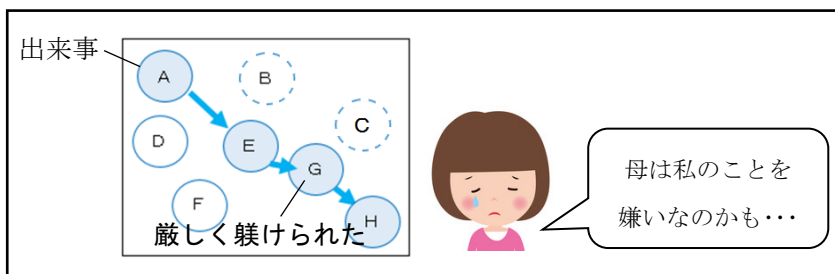


図1 母親から嫌われていると語る筋立て

しかしある時、父親から、母親は不治の病であること、もう長くは生きられないことを告げられます。すると、少女の中で、母親から厳しく躰けられたという出来事は、自分が居なくなった後も娘が困らないようにするための母親の深い愛情であったという捉え方になり、「自分も母から

愛されていたんだ」と思うようになります。(図2)

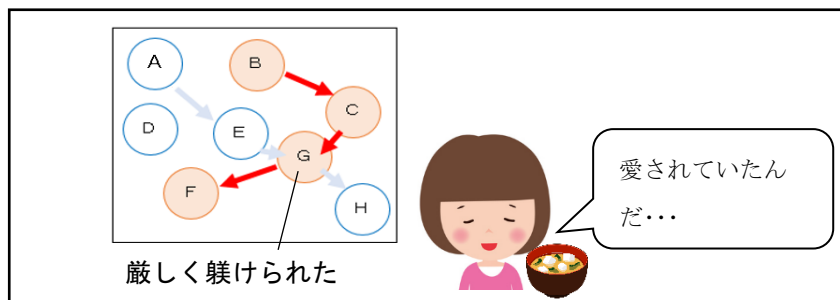


図2 母親から愛されていたと語る筋立て

このように、同じ出来事であっても、**出来事と出来事の結びつけ方(筋立て)**が変わることで**現実世界や自分自身を理解する「ものがたり」は変わります**。そして、異なる「ものがたり」をもつ他者と語り合う中で、自分では気づかなかった筋立てに気づき、「ものがたり」を書き換えていくことが、**新たな自分に変わっていくことにつながる**のです。

教育活動で言えば、教材との出会いや異なる他者と語り合い、学んだことによって学習者の「ものがたり」が書き換わった時、その学びはその人を変えていくものになるということです。このような考え方で「ものがたり」を教育実践にいかしていく取り組みが、本校における「ものがたり」の学びです。



3 「社会構成主義」の学力観

「社会構成主義」は、本校の研究の最も基礎となる理論です。では「社会構成主義」とは、どのようなものなのでしょうか。本校では、以下のように捉えています。

(1) 知識や社会は客観的に存在しているものではない

「社会構成主義」は、一般的な「実証主義」の学習観に対比するものとして存在します。

「実証主義」の学習観とは、指導者が科学的で客観的な知識を、「白紙」の状態の学習者に注ぎ込み蓄えていくような学習観です。そこではいかに体系的に効率よく知識を習得させるかが重要となります。学習の主導権は指導者にあり、**学習者はあくまでも受け身の存在**です。

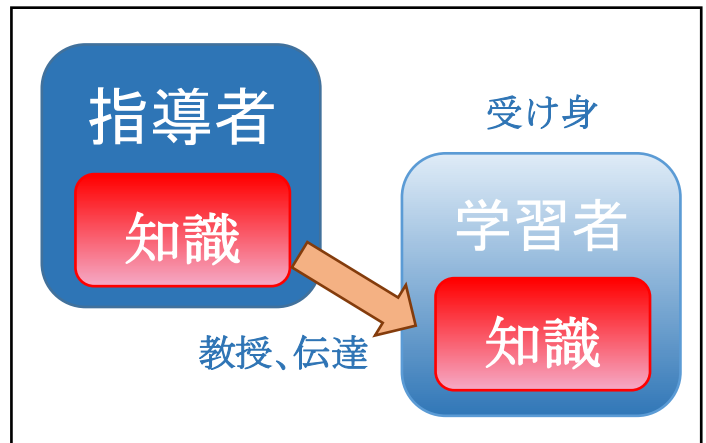


図3 実証主義的な学力観

これに対して「社会構成主義」では、知識や現実は客観的に存在しているものではなく、人々のコミュニケーション(言語活動)によって初めて、学習者の中に**構成されていくもの**だと考えます。

学習者は白紙の状態ではなく、既にそれぞれが学習内容に関連する既有知識や体験、素朴概念を持っています。そして教師から答えや解き方を教わるのではなく、自ら教材に働きかけ、課題を発見し、他者(教師、仲間)とコミュニケーションを取り、深く考える。自分の学習の過程を振り返

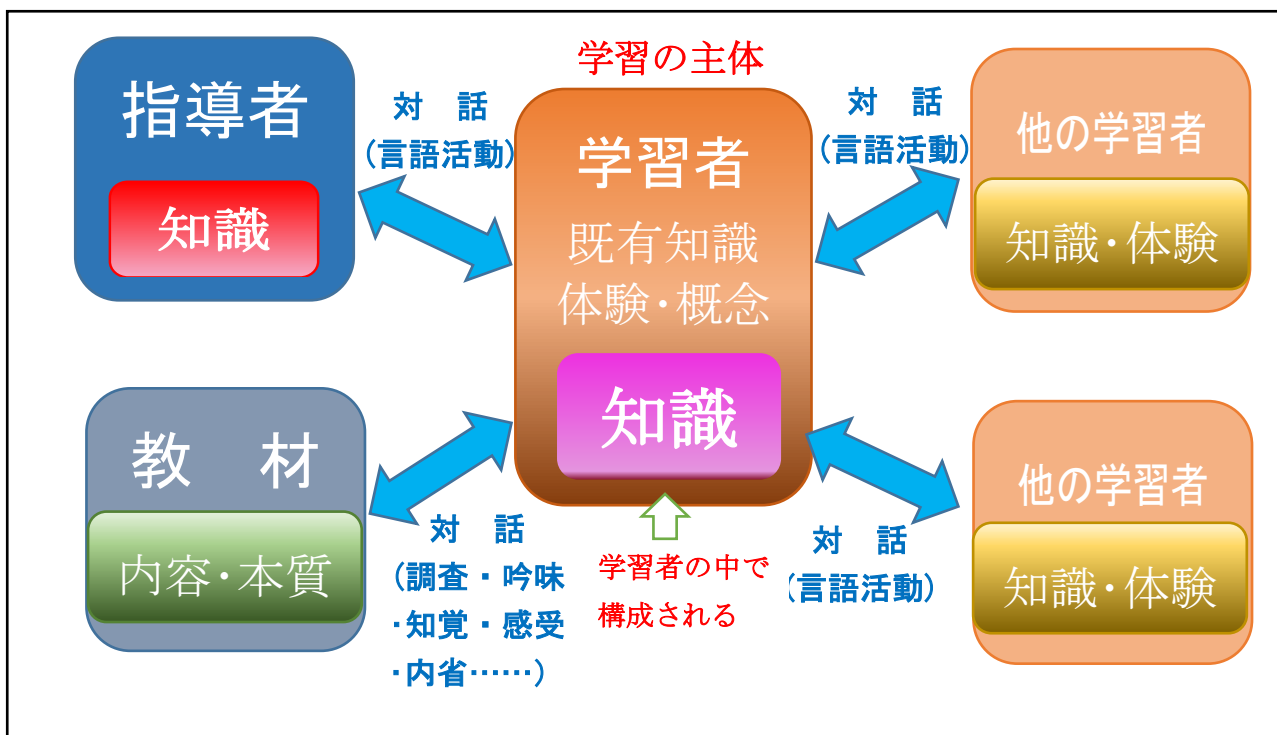


図4 社会構成主義による学力観

り、他者の意見を吟味し、結果として新たな気づきに到達する。**学習者自身が学習の主体**となるのです。

つまり、「社会構成主義」の学習観に基づく授業は、必然的に「主体的、対話的で深い学び」にならざるを得ません。同時に「言語活動」なしには成り立ちません。

(2) 科学的な知識についてどう考えるか

「**社会構成主義**」では「知識や社会は客観的に存在しているものではない」と述べました。それなら理系科目の「公式」「定理」「法則」などはどうなるのだ、と考えられるかもしれません。確かに、これらが「客観的に存在しているものではない」つまり、「一人一人が違っている」のでは、学問の意味がありません。

しかし、「客観的な知識を身につける筋道」についてはどうでしょうか。

既に述べたように、学習者は全く白紙で学習に臨むわけではありません。学習内容に関連する既有知識や体験、素朴概念などを持っています。これは「一人一人が違って」います。このような学習者に対して、一律に客観的な知識を注入して、本当の理解が得られるのでしょうか。

例えば電気の学習で「オームの法則」や「フレミングの法則」をただ教えるだけなら、それを使って問題を解くことはできるようになるでしょう。しかしそれは「問題を解く」だけの知識であり、「電気」そのものについての「汎用的」な知識にはなりません。断片的で、時がたてば（テストが終われば）すぐに忘れてしまいます。

ところが、適切な課題を設け、複雑なプロセスをたどる学習を行ったとすればどうでしょう。容易に解決できない課題を「一人一人違う」既有知識や体験、素朴概念を持った学習者が、互いに意見を交流させ、自分と異なる意見をすり合わせ、考えていく。それをくぐり抜け、**「自分なりの筋道だった考えや理解」**に到達したとき、知識は「他に転移可能」で「汎用的」なものになるのです。